

恵泉 花の文化史(6)

アネモネ

西村 悟郎(文化学科)

アネモネと聞くと多くの人は春に花壇で赤い花を咲かせる球根植物を思い出されるであろうが、山野草として扱われるイチリンソウやニリンソウ、また秋に野山に咲くシュウメイギクもアネモネ属(和名イチリンソウ属)の仲間である。アネモネ属には約120種が含まれ、多くは北半球に、一部は南アメリカ、南アフリカに分布する。アネモネ属には多くの重要な園芸植物が含まれ、栽培の歴史も古く、古代のヨーロッパの世界では神話にも登場する。また、シュウメイギクの園芸種はイギリスの秋の庭園には欠かせない重要な植物になっている。

伊勢原の短大園芸生活学科で過ごされた方には、アネモネは特に思い出される植物であろう。4月に入学してハーベイシャス・プラントマテリアル(花壇園芸)の授業で最初に学ぶ植物がアネモネである。その時Anemone coronariaというラテン名をはじめて学ぶ。学名を覚える苦しくも楽しい一年間の始まりである。また、9月も末になると原ホールとよばれるハウスの前の陽だまりで桃紫色のシュウメイギクが咲き出す。これは裏山から採集した株と聞いた。シュウメイギクの園芸種は中庭のボーダー花壇にも植えられていた。そのアネモネは、今は多摩キャンパスのロックガーデンで咲き、シュウメイギクの園芸種はハーブガーデンの中に咲いている。学生にとってアネモネの仲間は馴染みのある花壇材料となっている。今回はアネモネの世界に案内したいと思う。

1. 球根類のアネモネ

球根類のアネモネとして*A. coronaria*と*A. blanda*を紹介する。

1) *Anemone coronaria*(英名 Wind flower: 和名ボタンイチゲ、ハナイチゲ)

(1) 古代

春に咲く球根植物のアネモネの基本種は*Anemone coronaria* L. である。属名の*Anemone*はギリシャ語の「*anemos*」からきており、その意味は「風」である。アネモネは風が吹くときにしか咲かないという古い言い伝えがあり、またギリシャ神話ではアネモネは風の神の娘である (Smith, 1963)。種小名の「*coronaria*」は「花冠のような」という意味である。アネモネ属が属するキンポウゲ科の多くの植物は花卉を持たずガク片が花卉化しているところから、花卉の集まりである「花冠のような」という名前がつけられたと言われる。またアネモネの花は古代ギリシャ、ローマの時代から花冠(花の冠)や花環(ガーランド)として用いられた(コーツ, 2008)ことから来しているとも言われている。これは命名者のリンネ(1707-78)に聞かないと分からないことである。

*Anemone coronaria*の原産地は地中海沿岸地方である。その地域はヨーロッパ文明の発祥の地であり、本種は古代の時代から植物誌や神話、物語に登場する。一般に本種はアネモネとよばれているので、ここでもアネモネとよぶ。エジプトでは新王国時代(BC1570 - 1070頃)の庭園で外来の花としてバラ、ヤグルマギク、アザミなどとともにアネモネが栽培された(針ヶ谷, 1977)。また、メソポタミアではアッシリアの時代にティグラト・ピレサル一世(BC1115 - 1077)の庭園で西の方から伝えられたジャスミン、バラ、ユリ、アイリス、チュリップなどとともにアネモネが育てられた(Hobhouse, 1992)。

ギリシャでは春になるとアネモネ、ツルボラン、クロッカス、ユリ、ビンカ、スイカズラなどの野生の花が野原に咲く(Hobhouse, 1992)。古代ギリシャのテオフラストス(BC372-285)の「植物誌」(テオフラストス:大槻・月川訳, 1988)に花冠に用いる野生植物の一つとしてアネモネが記載されている。これによって、紀元前3~4世紀のギリシャでは野生のアネモネの花が頭につける冠の花として用いられていたことがわかる。赤いアネモネの花はギリシャの野に咲く花の中では目立つものであったらしくいくつかの神話にも

登場する。2つの神話がよく知られている。一つは、アフロディーテ（ビーナス）は息子のエロス（キューピット）の放った矢が胸に当たり、最初に見た美少年アドニスに恋をする。アドニスは猟に出かけて猪の牙にかけられて死んでしまう。アフロディーテはその死を悲しんで涙を流す。その涙からアネモネが生まれた。あるいは流れたアドニスの血からアネモネが現れたという。もう一つの神話は、花の女神クローリス（フローラ）には西風の神ゼフィロスという夫がいるが、ゼフィロスはクローリスの侍女であるアネモネを愛する。それに嫉妬したクローリスはアネモネを宮廷から追い出してしまう。やがてアネモネはやつれて死ぬ。それを悼んだゼフィロスは愛の女神アフロディーテ（ウェヌス：ビーナス）に頼んで彼女をアネモネの花に変えてもらったという。この2つの物語は多くの資料で紹介されている。加藤（1988）は最初の話をもローマ神話、2番目をギリシャ神話と紹介しているが、林（1985）は最初の話をもギリシャ神話と紹介している。また春山（1986）は出展を明示せず紹介している。著者は原典を読んでいないが、おそらく両方の話ともギリシャ神話の中にあり、ローマ神話に引き継がれたのであろう。なお、蛇足ながらアフロディーテはギリシャ語、ウェルヌスはラテン語、ヴィーナスは英語で愛と美と性の女神である。またクローリスはギリシャ語、フローラはラテン語で花の女神である。

また、古代ローマではプリニウス（27 - 79）の「博物誌：植物薬剤篇」（プリニウス：大槻編集，1994）で春を告げる花冠用の球根植物の花として紹介される。また、別の箇所では医療用のアネモネが詳しく紹介されている。それによると、「花の色は多くが緋色で紫色や乳白色のものもある。風が吹いていなければ花はけっして開かない。このことからアネモネ（ギリシャ語の風）と名付けられた。多くの人がアルゲモネ（アザミゲシ属）やヒナゲシと間違える。アネモネは頭痛、炎症、女性の子宮、乳の分布にも有効である。-----」と薬効について述べている。また、アネモネの持つ神秘の力も次のように紹介している。「マジ僧（古代ペルシャのゾロアスター教の司祭）は何か秘密の力をアネモネに帰し、その年に初めてその植物を見つけると、三日熱と四日熱の薬として採集するのだと唱えて抜く。それから赤い布で花を包んで日陰に保存し、必要なときは身に着けるとのことである」と護符として役立つと

述べている。

(2) 聖書とアネモネ

旧約、新約を通して聖書にはアネモネという植物の名前は全く出てこないが、聖書の中の最も有名な場面で登場する花がアネモネではないかということは広く知られるようになってきた。イエスは山上の説教で「なぜ、衣服のことで思い悩むのか。野の花がどのように育つか見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。しかし、言うておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾っていなかった。今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の花でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか。(マタイによる福音書6章28-30 新共同訳)」と語られた。このように新共同訳(1987年出版)では「野の花」となっており、口語訳(1954年出版)でも「野の花」と訳されている。一方、文語訳(1917年出版)では「なにゆえに衣のことを思い煩うや。野の百合は如何にして育つかを思え、勞せず、紡がざるなり。」と「野の百合」と書かれている。新約聖書が最初に書かれたギリシャ語では「kpivov(百合)」とある(廣部, 1999)。すると日本語の訳としては、「野の百合」と訳した文語訳の方が正しいということになる。しかし、イエスが伝道したガリラヤからナザレの地方にはユリ(*Lilium candidum*)は稀にしか見られず、イエスが「この花を見よ」とユリを指されたとは考えにくい。その代わり、この地方では春になるとたくさんのアネモネが咲くので、イエスが指差した花はアネモネではなかったかと考えられる。この推測は現在では多くの人の認識されることとなっている。この地方に咲く他の植物としては、ラナンキュラス、アドニス(フクジュソウの仲間)、ケシの仲間、カモミール、シュンギクなどがある(廣部, 1999)。これらも野の花の候補になる。

(3) 中世

アネモネがイタリアにもたらされた話が十字軍と関って伝えられている(アンダーソン:竹田訳, 1998)。第2回十字軍(1147-1148)の頃、アネモネは今日ほど地中海沿岸地方にあったわけではなかった。ピサの僧ウンベル

トは十字軍がパレスチナの地から帰る際、船の安定を保つために船底にパレスチナの土を詰めて帰ることを提言し、運ばれた土を墓地に置いた。それは聖地で亡くなった兵士を聖地の土に埋葬するためであった。ところが、その土からアネモネが芽を出し、緋色の花を咲かせた。その見慣れない緋色の花を見て、人々はたいそう驚いたという。そしてその花は「キリストの血」を表す花として修道院で大切に育てられ、やがてヨーロッパ各地の修道院に伝えられたという。ところで、この話ではウルベルト僧をはじめ多くの人々がアネモネをこのとき初めて見て非常に驚いたということになっているが、アネモネに関する記載は古代のプリニウスの時代にすでに詳しくなされており、ローマでは人々の花冠にも使われている。アネモネは中世の頃にはイタリアではすでに広く知られた花であったと思われる。その点から、ウルベルトがその時初めてアネモネを見たという話を疑問視する意見もある（コートツ、1989）。いずれにせよ、アネモネがイタリアからヨーロッパ各地の修道院に伝えられていったという話は、アネモネの伝播の道筋の一つとして傾聴に値する。

(4) 近世－現代

ヨーロッパの園芸の歴史において近世が始まる16世紀は多くの新しい植物が外の世界から導入された画期的な時期である。その時期にトルコからチューリップがオーストリアを経てオランダに導入され、同じ道を辿ってヒアシンス、ムスカリ、シクラメン、フリチラリアなど地中海沿岸の球根植物がアルプス以北のヨーロッパに導入される。アネモネもその中の一つであろう。また新大陸からはヒマワリ、ダリア、コスモス、マリーゴールド、サボテン、ジャガイモなどが導入された。ジャガイモは最初は観賞用であったという。16世紀はそれまでの中世の閉塞感に満ちた社会と決別して、爆発的にヨーロッパの園芸が発展する時期である。

イギリスで園芸植物の展示園を作ったジョン・ジェラード（1545－1612）は、その展示園に1000種もの珍しい植物を集めたという。彼はイギリスで最初の本草・園芸書である「本草誌」（1597年）を出版した。その本はそれまでのように薬効中心ではなく、装飾的な価値とその使い方について言及した画期

的なものであった。その中に12種のアネモネが記載されている。そのことは、この時代にはアネモネはすでに観賞用として栽培されていたことを意味する。また、イギリスのもう一人の先駆者であるジョン・パーキンソン(1567 - 1650)は「太陽の中の庭・地上の庭」(1629年)という本を出版した。その本は最終的には3800枚の植物の挿絵が入った大部のものであった。本の最初のページにはアダムとイヴのいるエデンの園が描かれている。その園にはダリア、パイナップル、バナナ、サボテンといった新大陸の植物や、シクラメン、チューリップ、クロッカスといった地中海沿岸から来た植物が描かれている、その中にアネモネも描かれている。パーキンソンにとってもアネモネは珍しい植物であったのである(春山, 198; コーツ, 1989; Bobhouse, 1992)。その後、17世紀にはフランスでもアネモネの人气が高まり多くの品種が作出され、それによってA. coronariaの園芸品種はフレンチ・アネモネと一般に呼ばれている。

16世紀末から17世紀はフランドルの画家によって花卉画が描かれた時代である。特に当時珍しかったチューリップ、ヒアシンス、バイモ、アネモネなどが花瓶に挿されて静物画として描かれている。それらの絵を見ると図鑑を見るように一つ一つの花が識別できる。画家としてはヤン・ブリューゲル(1568 - 1625)、オシアス・ベールト(1580 - 1623)、クラーク・ペーテルス(1589 - 1657)などが挙げられる。それぞれの画家はブリューゲルの明るい色調から、ベールトの抑えた色調まで各自が個性的に花を描いている。絵画史において花卉画が隆盛を極めた特色ある時代である(塚本, 1988; 小林, 2003)。

19世紀になると21世紀の今日でも栽培されているような傑出した品種が作出される。19世紀の後半にフランスのビルモラン社によって‘デュ・カーン(De Caen)’という大輪の一重、半八重の品種が作出される。色は赤、青、ピンク、白などがあり、今日ではその系統(第1図)の品種がいくつか作出されて花壇用、切花用に広く使われている。そして‘デュ・カーン’の系統がアネモネの代名詞のように使われる場合もある。一方、19世紀の末にアイルランドのダブリンで八重咲きで花びらの多い‘セント・ブリジッド’が生まれた。この系統もいくつかの品種が作出され花壇用に多く使われる。最近では、‘モナ・リザ’というアメリカで作出された実生で苗を作ることのできる品種が切り

花として広く栽培されるようになってきた。花は一重咲きの大輪である。しかし、今もって‘デ・カーン’と‘セント・ブリジッド’という100年前に作出された系統の品種群が主流として栽培されているのがアネモネの特徴といえる。

2) *Anemone blanda* (和名ハナアネモネ) (第2図)

*blanda*は「愛らしい」の意。地中海沿岸に原産する小型のアネモネ。草丈は15cmほどで、葉は3出複葉で、小葉は細かく裂ける。花の直径は4cmほどで、幅の狭い花弁状ガク片を10～20枚つける。小菊のような外観である。満開時は花が植物を覆うように咲きそろふ。花の色は青、白、ピンク、淡青などがある。昭和の初めに日本に伝わった。植物が小型であるのでロックガーデンや鉢物として用いられるが、小球根花壇として咲かせると花を楽しめる。小球根花壇とは、庭の比較的狭い場所にスノードロップ、クロッカス、ムスカリ、アネモネ・ブランダ、チオノドクサなどを植えて、春に次々と咲きだす花を楽しむという花壇である。

2. 宿根草のアネモネ

最近、株が小型で宿根性のアネモネが人気を博している。それらは2つのグループに分けられる。ひとつはヨーロッパやアメリカ原産でロックガーデンや鉢植えとして鑑賞されるもので、もう一つは日本の山野に野生するもので、野の花として、また山野草として鉢植えで鑑賞される。特に、日本に野生するイチリンソウ、ニリンソウ、アズマイチゲ、キクサキイチゲなどは関東地方でも雑木林の中でよく見かけられる。最近では野草の人気が高まり、観察会などが頻繁に行われるようになってきているが、その中であって、春に咲くイチリンソウ属(アネモネ属)の仲間美しい野草として人気が高い。

1) ヨーロッパ・アメリカ原産の宿根性のアネモネ

(1) *Anemone nemorosa* (英名Wood Anemone、和名ヤブイチゲ) (第3図)

ヨーロッパからアジア東北部にかけて分布する。落葉樹林の下草として自生し、草丈は20cmほど。葉は5裂する。花は直径約4cm。色は白であるが、



第1図 De Caen(デウ・カーン)



第2図 Anemone blanda(ハナアネモネ)



第3図 Anemone nemorosa(ヤブイチゲ)



第4図 A. multifida



第5図 *A. canadensis*



第6図 *A. ranunculoides*



第7図 *A. nikoensis*(イチリンソウ)



第8図 *A. flacida*(ニリンソウ)



第9図 *A. pseudoaltaica*(キクザキイチゲ)



第10図 *Anemone x hybrida*

淡紅色を帯びるものもある。開花期は3-6月。ヨーロッパの落葉樹林帯林では地面を覆うように密に本種の花が咲く様子が見られる。前述のジェラードのコレクションの中にも記録されている。野生の中から選抜した紫、赤、八重の品種をそろえていたという(コーツ, 1989)。ウィズレーガーデンの林間に咲く本種を見たことがあるが、そのとき赤ずきんちゃんを思い出した。童話に赤ずきんちゃんが森のおばあさんを訪ねるとき、道々に花を摘んで花束を届けるという話があるが、赤ずきんちゃんの花束の中にはきつこのネモローサも入っていたと思う。

(2) *A. multifida* (第4図)

アラスカから南アメリカ、またアメリカの東海岸にも分布する。草丈は30-60cm。葉は3出複葉、小葉に切れ込みが入る。花の直径は3cmほど、花茎は短い毛で覆われる。花色は淡黄色。開花期は5月。ロックガーデンに向く。淡い黄色の色がやわらかく、ロックガーデンの岩の色ともよく合う。

(3) *A. canadensis* (第5図)

カナダの東海岸から西海岸、アメリカのニューメキシコまで分布する。草丈は30-40cm。葉は3出複葉、小葉は切れ込み幅広い。葉の中央から花茎が伸び直径3cmの白い花をつける。5-6月に開花。ロックガーデンに用いるとよい。掌状に葉が開き、幾分輝きがあるので純白の花の色がよく映える。ロックガーデンに咲いていると目を引く存在である。

(4) *A. ranunculoides* (第6図)

ヨーロッパ、コーカサスからシベリア西部まで分布する。草丈20cm。葉は長い葉柄を持ち、3出複葉、小葉は切れ込み幅が広い。花は直径3cm、色は鮮黄色。花がランタンキュラスに似るところから種小名がある。ロックガーデンや鉢植えによい。アネモネ属の中では珍しく花が黄色である。陽を受けて輝くように咲く。花がランタンキュラスに似るところから種小名がある。

2)日本に野生するアネモネ

(1) *A. nikoensis* (和名イチリンソウ) (第7図)

日本の本州、四国、九州の落葉樹林に自生する。草丈は20 - 30cm。葉は3出複葉、小葉は細かく切れ込む。葉柄がある。茎頂に花茎を伸ばし花を単生する。

総苞葉は3輪生し葉柄がある。花弁状ガク片は5 - 6個。直径4cm。花色は白。春先の雑木林の中で、深緑の葉をいっぱいに広げて輝くような白い花を咲かす様は実に美し。身近では神代植物園の雑木林で見ることができる。

(2) *A. flacida* (和名ニリンソウ) (第8図)

日本、中国東北部、サハリンの落葉樹林に自生する。草丈は15 - 25cm。葉は3出複葉、小葉はわずかに切れ込みイチリンソウほどには切れ込みが深くなく丸みをおびている。茎頂に2 - 3輪の花をつける。最初の花が開いたあと、次の花茎が伸びて開花する。2輪にならず、1輪や3輪のものもある。総苞葉は3輪生し葉柄がない。花は白、ガク片は5個。直径2cm。開花期は3 - 5月。歌謡曲の題名になるほどよく知られた植物であるが、実物を見る人はそれほど多くないであろう。可憐な花が寄り添う様子には心動かされる。板橋区赤塚公園には群生地があり、4月には特別公開される。

(3) *A. raddeana* (和名アズマイチゲ)

本州、四国、北海道から朝鮮半島の落葉樹林に自生する。草丈20cm。葉は3出複葉で長い葉柄があり、小葉は浅く切れ込む。茎長に花を一個つける。総苞葉が3輪生し、短い柄がある。花は幅の狭いガク片が10 - 13個つく。色は白。裏に紅紫色が薄く入る。直径は3 - 4cm。開花期は3 - 5月。ガク片の数が多く、幅が狭いのでイチリンソウやニリンソウと区別がつく。南高尾山のカタクリの群生地に、カタクリと同じ時期に咲いているのをみかけた。

(4) *A. pseudoaltaica* (和名キクザキイチゲ) (第9図)

北海道、本州の中部から北部の落葉樹林に自生する。高さ20 - 30cm。葉

は3出複葉で、小葉は切れ込みが入る。花茎につく葉は3輪生し、葉柄がある。花は単生し、ガク片は10枚前後。淡紫色または白色。直径4cm。幅の狭いガク片が四方に広がるので菊の花のように見えるところから和名がある。花は大きく立派に見える。開花期は4-6月。神代植物園で見られる。

3. シュウメイギクの園芸種

シュウメイギクとその園芸種も宿根草であるので前項に含まれるべきであるが、草丈が1m近くになり草姿が前項の植物と全く違うことと、本種とその園芸種は花壇植物としての特に重要であるということで項目を分けた。その重要性は晩夏から秋のイギリスの庭園を訪ねると一目瞭然である。イギリスの庭園のその時期の花壇はシュウメイギクの園芸種を抜きにしては成り立たないというほど、重要な役割を果たしている。中国に原産し、日本でも野生しているシュウメイギクであるが、プラントハンターによってイギリスにもたらされ園芸植物として華麗な変身をとげ、いまでは日本でもその園芸種が花壇でも使われるようになった。

1) *Anemone hupehensis* var. *japonica* (英名Japanese Anemone、和名シュウメイギク、キブネギク)

中国が原産で古い時代に日本に伝えられ、日本各地に広がっていった。自生地は本州、四国、九州。名前は「秋明菊」と書く。京都の貴船あたりに自生が多いことから「貴船菊」ともよばれる。草丈は50-80cm。葉は三出複葉で、小葉は3中裂する。茎頂で分枝して花を多くつける。花は八重で幅の狭いガク片を20-30個付ける。直径は5-7cm。花色は淡紫紅色。開花期は9-10月。日本の秋の山野でみかけられる。庭に植えられ、切り花は茶花として観賞される。中国原産の種は*Anemone hupehensis*で、日本のものはvar. *japonica*として変種となっている。中国のものはガク片が5-6個であるところが異なる。

2) *Anemone* x *hybrida* (第10図)

シュウメイギクが最初にヨーロッパに生きてそのまま送られたのは1844年で

ある。ロバート・フォーチュン（1812－80）によって上海からロンドンの園芸協会に送られた。1847年にネパール・ヒマラヤ原産の*A. vitifolia*と交配することによって草丈が1mを超える高性で、花色が桃色の交配種が作り出された。その後、さらに交配が続けられて今日イギリスで見られるような花径が10cm近くもあるような大輪で八重や一重咲きの品種が作られるようになった。花の色も白、桃、赤桃色、紫紅、深紅色など多彩である。草丈が1mを超すほどの高性であるので、秋のボーダー花壇やレンガの壁を背にして咲く姿は素晴らしい。

4. まとめ

アネモネ属に含まれる植物は多くの園芸植物の中でもっとも人類と関わりのある植物の一つと言える。*A. coronaria*は古くから人類の歴史に登場する。それは人類の文明が生まれた地中海沿岸に自生し、その紅の花が人々の目に留まったからであろう。歴史の流れとともに人々の生活を飾り、物語に語られてきた。16世紀になり、ヨーロッパの園芸の夜明けとともに、その中心の一端を占める存在となり、新しい品種も作り出された。絵画にも描かれた。それが現在へと繋がり、春の花壇に、そして切り花に欠かせない存在となっている。また、北半球を中心に自生する多くの小型の宿根草のアネモネは、山野の植物を鑑賞する人々にとっては最も人気のある春の花となっている。日本ではイチリンソウ、ニリンソウなどは知らない人がいないくらいに、よい知られた野の花である。また、ロックガーデンや鉢植えとしても身近な楽しみとなっている。一方、中国で生まれた大型のアネモネであるシュウメイギクが、イギリスを中心にヨーロッパで改良が行われて、今では秋の花壇には欠かせない花になっている。花壇でもまた山野でも私たちを楽しませてくれるアネモネの仲間をこれからも大切にしていきたい。

参考文献

日本聖書協会 1917 聖書（新約聖書）P.12 日本聖書協会

日本聖書協会 1954 聖書（新約聖書）p.9 日本聖書協会

Smith, A.W. 1963 *A Gardener's Book of Plant Names* pp. 33 Harper & Row

- 春山行夫 1980 花の文化史 pp. 199 - 200 講談社
- 林 角郎 1985 朝日園芸百科 13巻 pp.162 - 164 朝日新聞社
- 春山行夫 1986 花ことば pp. 59 - 63 天山舎
- テオフラストス(大槻真一郎・月川和雄訳) 1988 テオフラストス 植物誌 pp. 252 八坂書房
- 共同訳聖書実行委員会 1987 聖書 共同訳 (新約聖書) p. 10 日本聖書協会
- 佐野 泰・塚本洋太郎・林 角郎・加藤憲市 1988 園芸植物大事典 1巻 pp.107 - 113 小学館
- コーツ、A.M.(白幡洋三郎・白幡節子訳) 1989 花の西洋史 pp. 26 - 33 八坂書房
- ウェザーレッド、H.N.(中野里美訳) 1990 古代へのいざない プリニウスの博物誌 pp. 119 - 120 雄山閣
- Hobhouse, P. 1992 Plants in Garden History pp. 17, 20 Pavilion
- プリニウス(大槻真一郎訳) 1994 プリソン, A. 1998 花の歴史 花々との出会い pp. 78 - 81 八坂書房
- ブルッケル、K.(横井政人他訳) 1996 A-Z 園芸植物百科事典 pp. 114 - 117 成文堂新光社
- 麓 次郎 1999 季節の花事典 pp. 9 - 15 八坂書房
- 小林頼子 2003 花のギャラリー pp.66 - 67, 70 - 71 八坂書房